

云。人皆成於手。我獨成於心。

一、擊蛇笏

宋祥符間。天慶觀有蛇妖。極恠異。郡刺史日兩至於其庭朝焉。人以爲龍。舉州人內外遠近。罔不駭奔於門。以觀恭莊肅。祇無敢怠者。今龍圖待制孔公。時佐幕在是邦。亦隨郡刺史於其庭。公曰。明則有禮樂。幽則有鬼神。是蛇不亦誣乎。惑吾民亂吾俗。殺無赦。以手版擊其首。遂斃于前。則蛇無異焉。石介偉之撰。銘并序。

一、蘇東坡飲食之三養

蘇東坡在黃州。嘗書云。自今日已往。早晚飲食。不過一爵一肉。有尊客盛饌則三之。可損不可增。有召我者預以此告之。主人不從而過是乃止。一曰安分以養福。二曰寬胃以養病。三曰省費以養財。依歸錄

一、疖瘡の毒を發する者

世以癩疾鼻陷爲死證。劉貢父晚有此疾。后山叢書本邦近世疖瘡の毒を發する者、多く鼻陷り、甚敷者は人と齒しがたし。中華には是を以て癩疾とするか、又は毒瘡をも癩とするか。

一、獻芹の典故

世にあまねくいへる獻芹の事實は、出處多き儀也。曝脊美芹の語列子に見えたり。云。宋國有田父。嘗衣緇廣。至春自曝於日。當爾時不知有廣。履陳室綿績狐貉。顧謂其妻曰。負日之暄人莫知之。以獻吾君。將有賞也。其室告之曰。昔人有美。我葵甘泉。莖芹萍子。對鄉豪稱之。鄉豪取嘗之。蜚於口。慘於腹。衆晒之。祝穆按列子所載止如此。稽叔夜與山巨源絕交書云。野人有快炙背而美芹子。欲獻之至尊。後世遂有獻芹之說。實無出所。特叔夜合而言之耳。

一、司馬溫公の榜書

司馬溫公作相日。榜于客位曰。訪友諸君。若親朝政。闕遺庶民疾苦。欲進忠言者。請以奏牘聞於朝廷。光得與同僚商議。擇可行者進呈。取旨行之。若但以私書寵喻。終無所益。若光身有過失。欲賜規正。即以通封書簡。分付吏人令傳入。光得內自省訟。佩服改行。至於整會官職差遺。理雪罪名。凡于身計。並請一面進狀。光得與朝省衆官公議施行。若在私第垂訪。不請語及。某再拜咨白。容齋隨筆

愚謂。凡大臣と作て國政を干り知るものは、必ず溫公の此榜一通を寫し、座右に置て戒とせば、補益する事多らん。

一、嘗貴堂の意義

余近頃一醫官の家に臨む。堂中掲一榜て嘗貴堂と題す。嘗貴の二字珍敷文字故、其出處を問へば答へ云。此語說苑に出づ。云。嘗賤及貴。某近年公上の御藥を調進し、頗る御恩庇を蒙り候。誠に嘗賤及貴といふものと存じ、能く此語に叶候故堂號に仕候由也。余退て後思之に、文字の取樣意義を失ふものゝ様に候。嘗及とか及貴とか有之候はゞ、嘗賤の意に叶可申敷。嘗貴にて候は却て嘗貴及賤と可言に似たり。古人の意味に反せり。こゝに記して識者に問ん事を欲す。

一、膏育の疾

晋の王戎司徒を拜し、位台司を總ぶといへども、間々小馬に乗り便門よりして出で遊ぶ。見る者其三公たることを不知故、史多くは大官に至り、道路に相遇へば輒避之。性利を興すことを好で、廣く八方に田園水碓を收め天下に周備す。積貫聚錢不知紀極。毎に自執牙籌晝夜算計。恒若不足。その儉嗇貪鄙、天下の人謂之膏育之疾。余謂膏育之疾何國無之哉。今有所感記于此。

一、沙堤の語義

貴人の爲に沙を敷くこと也。事文類聚新集第五・六の内に見えたり。沙路とも云ふか。李賀が路曲の詩に云。柳陰半眠丞相樹。瓊馬玳玲踏沙路。

一、改元詔書並引文

詔劉漢協和武帝。有建元之美。李唐泰平文皇。有貞觀之盛。凡上天授命。下民歸德。履端居正。改元布新。實前王之令典。我朝之舊章也。朕謬承洪基。以薄德臨黎庶。叨奉神器。顧眇身畏皇天。尚賴股肱匡救之力。以致政教雅黜之化。垂拱仰成。述而不作。紀元慎始。建而不恃。其改享保二十一年。爲元文元年。主者施行。

元文元年四月二十八日

文選曰。武創元基。文集大命。皆體天作。制順時立政。至于帝皇。遂重黜而累盛。

唐橋大内記 菅 在秀

一、書只貴熟讀

愚按に、學の字は固より學問文學等の事也。又ひたすらに讀くことを學といふ也。論語に學而不思則罔。思而不學則殆。といふが如き學は、便ち是讀なり。朱文公言曰。書只貴熟